幸福の黄色いハンカチ―映画文学人生論

原作：ピート・ハミル　“Going Home”(1971)
監督：山田洋次　(1977年)　脚本：山田洋次　朝間義隆
出演：島勇作　高倉健　撮影：高羽哲夫
島光枝　倍賞千恵子　音楽：佐藤勝
花田欣也　武田鉄矢
小川朱美　桃井かおり　渡辺課長　渥美清

お前それでも九州の人間か

山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』はいわゆるロードムービーで、刻々と変化しながら画面を流れる北海道の風景の映像が素晴らしい。観客はいつのまにか主役の三人と一緒に非日常的な旅をしているような気分にさせられる。車の走行ルートは網走海岸、阿寒湖温泉、睦別、帯広、狩勝峠、新得警察署、歌志内、そして夕張。

三人の男女はそれまではお互いに見ず知らずの間柄だった。退職金と貯金はたいて新車を買った欣也（武田鉄矢）が網走駅前で朱美(桃井かおり)をナンパして食堂に入ってくると、隣の席で島勇作(高倉健）がビールをうまそうに飲んでいる。

刑務所を出所したばかりの男が六年ぶりに味わいながら飲むビールとはその時点ではもわからない。お互いに会話をかわすこともなく、それだけの縁で終わるところだったが、網走の海岸で再会し、写真のシャッターを押してもらった。それがきっかけになって、車に同乗することになった。

欣也と朱美はまだ恋人の関係にはなっていない。欣也があせって、強引に迫ろうとして抵抗されるのを見て、「お前それでも九州の人間か」と勇作が説教する。

勇作が九州の飯塚から北海道の夕張へ働きにきた炭坑夫だったということがここでわかるが、刑務所帰りということまではわからない。もちろん妻（倍賞千恵子）が夕張で待っているかもわから

幸福の黄色いハンカチ ――― 映画文学人生論

ないが、勇作は網走の郵便局でハガキを出している。実はそれが結末へ向けての重要な伏線だったことが後でわかる。

「この手紙がつく頃、俺は夕張に行くが、もしも、お前が今でも独りで暮しているなら、庭先の鯉のぼりの竿の先に黄色いハンカチをつけておいてくれ。そのハンカチを見たら俺は家に帰る。ハンカチがなかったら、俺はそのまま夕張を去っていく」というのがハガキの内容だ。

その話を打ち明けられた若い二人は感動した。勇作は妻が待っていることに確信を持てず、あきらめて引き返そうとするが、若者たちはそんな彼を励まして夕張まで車を走らせる。これといって何をするあてもなかった彼等に共通の目的が生まれ、連帯感が生まれた。

その目的は幸福、幸福のシンボルは黄色いハンカチだ。そして、そのハンカチが一枚ではなく、何十枚、何百枚もあったという結末である。観客も一緒になって感動する。

ドライブの途中で、炭坑夫求むという求人広告の案内板が見えるので、勇作の職場は約束されている。その後の歴史をみると、一九九〇年、夕張炭坑は閉山。二〇〇七年、夕張市は事実上の財政破綻。前途多難が予想されるが、幸いにして映画の時間は一九七七年でとまっている。

幸福の時間よとまれ蝶の夢